

諸役雜公
事ヲ免除
セラレ

永正六年八月二十七日 二十八日

九二二

内侍所供御人家久申、諸役万雜公事免除事、度々綸旨并證文等分明上者、任先例不可有相違、爲惣座頭、於子孫永代令商賣、可專神役之由、可加下知間所被仰下也。

永正六年八月廿六日

(甘藷寺伊長)
左少辨判

内膳奉膳正

二十七日、禁中二人舞アリ、

〔實隆公記〕一四十 八月廿七日、丁亥晴、略中

今夕於禁中有二人舞、自越前上洛、爲石山勸進香菊大夫云々、内々雖有召不參、相公羽林參入、更闌退出、勸進猿樂事、内々被仰出阿野云々、

○コノ後、二人舞ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔實隆公記〕一四十 閏八月二日、辛卯霽、略中

今夕於禁中有二人舞、人々成群云々、

青女内々參入、於記錄所長御座籍聽聞云々、

三位禪尼同道、入夜歸、

二十八日、子戊内大臣轉法輪三條實香ノ女、貞敦親王ノ上臈卜爲ル、

閏八月
人々群ヲ
ナス

越前ヨリ
上洛ス
石山勸進
香菊大夫

禁裏内々
ノ仰アリ

〔實隆公記〕一四十 四月九日、庚午、略中

今日東南院宮參伏見殿給云々、勾當媒介也、此事可否未辨、莫言々々、

〔實隆公記〕一四十 八月廿六日、丙戌、陰晴、略中

(轉法輪三條實香)
(貞敦親王)
内府息女爲中書王上臈、明後日新參云々、此事自禁裏内々被仰之子細在之、其間事有被相談之事、就此事、予計又上臈局和讒子細在之由、新大典侍有被告知之事、不可說事也、難勒筆端矣、

廿八日、戊子、晴、略中

新大典侍來臨、内府息女竹園新參事、一往不被申入之條、慮外之由被仰下、叡慮尤也、去春已可參武家之由、沙汰之間、定而被申入、歟之由尋之了、上臈又不被申事也、如何之由申入了、今夜終以新參云々、

〔參考〕

〔尊卑分脈〕三條氏 公季流

實香

公賴

女子中務卿貞敦親王室
邦甫王母

永正六年八月二十八日

九二三

世系

去年義尹
ノ上臈卜
ナルノ沙
汰アリ

永正六年八月二十八日

女子 將軍家上臈

九二四

義尹、山城誓願寺ニ、散錢ヲ安堵セシム、

〔誓願寺文書〕

○山城
(足利義尹)
(花押)

誓願寺散錢事、早任先例、寺家一圓彌領掌不可有相違之狀如件、

永正六年八月廿八日

上杉顯定、平子房長ヲシテ、越後杉一揆ノ徒ヲ糾合シ、忠節ヲ勵マシム、

〔別本歷代古案〕

六

杉一揆之輩、近年令離散候由候、然者如前々有同心、可被勵忠節之事肝要候、
子細候者、可加詞候、恐々謹言、

上包ニ永正六年下有、
八月廿八日

(上杉顯定)
可諄 花押

平子牛法師殿

△ 杉一揆ヲ
勵マシ
シテ忠節

顯定書狀

平子牛法師被相談、此砌被勵忠節候者、可爲感悅候、然者有勇樣可相計候、恐々謹言、

細川

九月一日

(越後顯定)
當郡杉一揆 御中

可諄 花押

當一揆之輩、自今以後令離散候者、爲恩賞其後事可被相計候、恐々謹言、

九月七日

可諄

平子牛法師殿

○杉一揆ノコト、詳ナラズ、上杉房能、長尾爲景ニ攻メラレテ、越後天水ニ自殺スルコト、四年六月二十四日ノ條ニ、顯定、爲景ヲ擊チテ、之ヲ越中西濱ニ走ラシムルコト、本年七月二十八日ノ條ニ、又毛利元賀ヲシテ越後三條城ヲ攻メシムルコト、同九月二十一日ノ條ニ見ユ

二十九日 御不豫

〔實隆公記〕

一四一

八月廿九日、己丑、晴

禁裏御不例也、以書狀申入之、今日御減氣云々、詩短冊作進之、

閏八月六日、乙未、陰雨、

參内、於勾當局、御不例事久無御減氣之條、不可然之子細等相談之、内々申入

永正六年八月二十九日

九二五

三條西實
隆詩短冊
ナ上ル

翌月ニ至
ルモ御減
氣ナシ

永正六年八月是月

之處、於御三間御對面、

九日、戊戌、天晴、○中略

入夜中御門亞相入來、月下對談、明日御會延引、○中略和漢聯句御會ノコト

ニ見御不例無御心元之間參内、退出次云々、暫言談了、

勸修寺門跡恆弘法親王ヲ一品ニ敍ス、

〔華頂要略〕百四十諸門跡傳一 恆弘法親王 二品、常盤井殿、直明王御息、

後崇光院御猶子、安祥寺々務、八月廿九日敍二品、七才、九才、

〔密宗年表〕永正六年八月廿九日、恆弘二品親王宣下、勸修、

○恆弘法親王薨ゼラル、コト、閏八月八日ノ條ニ見ユ、

是月、少貳資元ノ黨、豐前、筑前二峰起ス、大内義興、兵ヲ遣シテ之ヲ擊夕シム、

〔佐田文書〕○三肥後

上洛以來其堺之儀別而馳走、剩去年八月下旬、凶徒令徘徊之處、郡内衆被相談之、依堅固調儀、不日屬靜謐之由、注進狀到來、尤感悅之至也、彌入魂可爲肝要之狀如件、

永正七年三月廿三日

佐田大膳亮殿

〔山野井文書〕○安藝

大内義興是時在京

山口雜說之由就風聞、被馳參之次第、尤神妙之至也、何様至京都可被注進之、仍感之旨所仰執達如件、

永正六年十一月二日

左兵衛尉花押

木工助花押

伯耆守花押

兵庫頭花押

能美四郎殿○本書、資元黨蜂起ニ關スルモノナルベシ、

〔兒玉韞採集文書〕王丸氏古文書

御上洛以來、其堺恐劇及數度之處、高祖在城、別而馳走之通、烏田種部玄蕃允注進之狀、慥遂披露候、一段御感之至候、○中略、京都船岡山戰ノコトニカ、八年八月二十四日ノ條ニ收ム、

九月廿七日

永正六年八月是月

道輔

永正六年八月是月

「弘中越後守」
武長

九二八

「船岡山役係永正八年」
王丸神五郎殿

〔大内氏實錄〕世系十 義興 永正六年己巳秋八月、少貳比殘徒、筑前に起
る、軍を差遣して之を撃つ、古文

近江金剛定寺、本尊再興ヲ募縁ス、

〔金剛定寺文書〕江〇近

請特蒙十方檀越之御助縁、奉刻彫江苧蒲生郡金剛定寺本尊子細之狀、
竊以、西天聖主之法、遙傳日域之雲矣、東方君子之國、悉仰月氏之風焉、發源竺
土、則優填釋迦佛像、闡其始、移教晨旦、則漢明宋代制作日尙新、自爾以降、傳通
三國之道、齊崇金檀銅紫靈軀、末法萬年之教、皆造沫宇丹青之形像、蓋是三寶
敬信根基、四生化育要津者乎、粵江州蒲生郡有一宇精舍、名西中山、號金剛定
寺、源起聖德太子素願、而久積戒定惠解之白業、本尊者是西方補處開士、則一
十一面觀音也、然間三身萬德圓月之光、遙雖係無相心空、四構六度弘誓之船、
新棹有海波瀾、三世唱正覺、六趣分身形、慈雲靡我國、機感深此界、因茲鴻鐘任
擊、翻男女所求、潮海時臻、滿現當志念、凡度生風繁濁土、招提久開普門者歟、抑

本尊ヲ彫
刻セント
ス

厩戸皇子
ノ御發願
ニ因ル
本尊十一
面觀音

兵燹ニ罹
ル

亦貴薩埵大悲、臨伽藍殿階、香雲片々昇、佛燈恆耀、梵風時々扇翻、忍衣袂、是以
念誦讀經、之節カ踏法地於足下、晨鐘夕梵之聲々、驚生滅於身上、殊其地爲躰、春
花開梢、移寶樹林色、種葉浮流、澄功德池水、允是凡聖同位自顯、依正相即遮眼、
未曾有佛身、不可量衆圍乎、然去文龜癸亥風吹兵火、嬰焚燎災、已來邑里村縣、
吞悲送年、田夫野客、蹙眉過砌、砌粵沙門某、香城粉骨之志、無何起、雪嶺投身之心、
胸間深、是故百年榮果准春夢、三明識都欣秋月、依之忘身於五陰、止宿草庵、移
心於百福、莊嚴蓮座、方今興佛閣、絕土木、繡畫之資、雖加之外護縁、未遂本尊造
立之望、宛如但行五度不得般若、殆似磨圓珠忽闕一隅、歎而有餘歟、依之勸奉
加於四遠、八方道俗務刻彫於三智五眼佛躰、有文云、彌猴建塔生、切利天、野鴈
銜花往彌陀國、畜獸尙傾修善教、誠人身盍投佛陀資、貯乎視亦聚微滯而湛千
尋泉、重塊土而成五嶽巔、探多小無形、真俗已同味也、一樹一竹施入莫憚、然則
上自万騎紫閣、下及百結蓬戶、同志男女、與善緇白、現誇百穀豐盈、保千歲之壽
域、當涉七寶飛梯、昇一如覺臺、仍勸進之狀如件、

永正六年己巳八月日

從永正六年八月至同七年五月三日、奉遂御本尊開眼供養畢、

永正六年八月是月

九二九

永正七年
五月三日
落慶式

永正六年八月是月

九三〇

○金剛定寺兵燹ニ罹ルコト、文龜三年是歲ノ條ニ見ユ、

閏八月庚寅 朔 盡

三日壬辰幕府、東寺雜掌ヲシテ、其境内ノ見入關ヲ停止セシム、

〔東寺百合文書〕○山城 一之四上

東寺境内公事錢以下往來旅人課役事、毎々依及物忝、向後被追放境内之旨、先度御下知之上者、於彼見入關者、任先規被停止畢、若有違犯之輩者、隨注進可被處嚴科之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正六
壬八月三日

(英出)
英致(花押)

(基雄)
基雄(花押)

當寺雜掌

〔東寺百合文書〕○山城 一之四十

東寺境内關事、毎々依及物忝、被成度々御下知、禁制之上者、彼見入關事、任先規、寺邊之境、在、被停止畢、宜被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正六
壬八月三日

(英致)
英致(花押)

(基雄)
基雄(花押)

當寺雜掌

永正六年閏八月三日

九三一

公事錢以
下旅人課
役ヲ課ス

永正六年閏八月三日

九三二

幕府、山城寶鏡寺塔頭祥雲院ニ、同國松崎内ノ田地ヲ領知セシム、

〔寶鏡寺文書〕

○山城

日野苗子
知行所

山城國松崎内田地事、梶井御門跡雜掌雖有申子細、任已前高水寺殿御知行之例、被預遣訖、可被全領知候由、所被仰下也、仍執達如件、

永正六年閏八月三日

前丹後守(花押)
近江守(花押)

祥雲院殿雜掌

〔包録〕祥雲院殿御雜掌

兵庫助興重

遵行狀

山城國松崎内田地事、任去潤八月三日御下知旨、云下知、云當土貢、御知行不可有相違之狀如件、

永正六年十月廿一日

兵庫助(花押)

祥雲院殿御雜掌

毛利興元、栗屋元秀ニ、其勤勞ノ功ヲ賞シテ、備後津田郷ノ地ヲ宛行フ、

〔萩藩閥閥録〕

七十四
栗屋縫殿

石道名未
數名

備後國津田郷之内石道未數合兩名、今度長々勵勤勞之間、爲給所宛行者也、可存其旨之狀如件、

永正六年閏八月三日

興元御判

栗屋縫殿助殿

○興元、元秀ニ、どう名及ビおつち山ヲ給スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔萩藩閥閥録〕

七十四
栗屋縫殿

どう名之事、栗屋縫殿助元秀爲給所扶持仕候、衷實也、仍一行如件、

永正六年八月十四日

興元御判

栗屋縫殿助殿

おつち山

おつち山の事給所として可申付候、としほ口此事、よく可申付候、

二月廿八日

興元御判

ぬい殿

五日、甲午、三條西實隆所持ノ周易ニ、宸翰ノ題字ヲ賜フ、

〔實隆公記〕

一四一

閏八月五日、甲午、陰、入夜雷雨、

永正六年閏八月五日

九三三

庭田重親
ナシテ返
付セラル

御禮ヲ申
入ル

御落飾
勸修寺ニ
住セラル

後崇光院
御猶子
安祥寺々
務兼帶

永正六年閏八月八日

九三四

周易愚本五帖銘被染宸筆、以重親被下之、殊畏存之由申入了、
六日、乙未、陰雨、○中略御不豫ノコトニカ、八月二十九日ノコトニカ、内々申入之處、於御三間御對面、
周易銘事、畏存之由申入之、

八日、丁酉勸修寺門跡恆弘法親王薨ゼラル、

〔皇親系〕六

貞成親王（後崇光院）

恆弘親王彈正尹、常磐井宮直仁親王子、嘉吉三年落飾爲僧、初名恆興、後改今名、住勸修寺、爲上皇猶子、爲親王、敘二品、永正六年閏八月八日薨、年七十

〔華頂要略〕百四十

勸修寺

諸門跡傳一

二品

恆弘法親王

常盤井殿直明王御息、後

彈正尹

崇光院御猶子、寶德三年二月六日、補東大寺別當、安祥寺々務、永正六年八月廿九日、敘二品、七十九才、永正六年閏八月八日薨、七十九歲、

〔諸門跡譜〕中

勸修寺

恆弘法親王

無品、安祥寺務兼帶

直明王男、滿仁親王孫、龜山院曾

〔本朝皇胤紹運錄〕○實相院本

直明王

恆弘法親王勸修寺、後崇光院御猶子、

〔皇親系〕五

直仁親王初名直明、繼常磐井宮、後改今名、任彈正尹、

恆弘親王初名恆興、爲後崇光院太上天皇猶子、

○恆弘法親王、勸修寺ニ入室セラル、コト、嘉吉三年是歲ノ條ニ、東大寺別當ニ補セラル、コト、寶德三年二月六日ノ條ニ、二品ニ敘セラル、コト、永正六年八月二十九日ノ條ニ見ユ、

十五日、辰甲三條西實隆、觀月十五首和歌ヲ張行ス、

〔實隆公記〕一四十

閏八月十五日、甲辰、天晴、九月節、甘黃入來、雲龍院來臨、

今夜閏月八月十五夜、邂逅良辰也、仍十五首和歌俄張行、四鼓之後詠終之、則

於冷泉亞相門令見之、各可被詠之由、今晚申遣之、未出現云々、右府卿、姉相公

等出逢、暫見月、其後禁庭月一覽、寒氣侵衣之間、則歸家暫詠吟就寢、月色誠如

畫、珍重々々、今日相公當番、相博宗藤、
十六日、乙巳、天晴、冷大姉、右府卿、冷三位、道堅等、各昨夜十五首歌送之、有興愚

詠、令見道堅之處、則又持來雜談、信堅房來、

永正六年閏八月十五日

九三五

初ノ御名
恆興

永正六年閏八月十五日

九三六

〔道堅法師詠草〕

永正六年閏八月十五日、當座、

三條西前内大臣家

空の色も今宵一しほ時雨せし後の葉月や照まさる覽
まつ空にはやくもいてくくる雲をいそくや遠き山のはの月
いひやらんかた社なけれすむ空は四方の嵐の秋のよの月
あかす思ふその海山の秋もたゝ都の月の行衛成けり
松浦かたもろこしかけて思ふにも浪路へたてし月の行末
あくるよのかきり有ともかへらてや暮を待みんむさし野の月
ふかきよの宿をはいてゝ我なから行かたしらぬみちのへの月
小鹿なく月のふもとの小松原くもらぬ空をゆく嵐かな
花薄みたれ兼たる虫の音も袖よりあまる露の月影
山かけはこゝろや住と大空に頼むいくよも月を社みれ
月をさへ老の泪のふる里にうらみてぬれは鴈もなく也
かゝる身の夢を忘てみる月に露の命やなかきよの床
消てよに見さらん後の秋の月おもへはかなし空のうき雲
つくくゝとおもへは月にふかきよの心もしらぬ涙落つゝ○一首

十七日、^{丙午}菊池政隆、兵ヲ起シ、菊池武經ト肥後ニ戰フ、政隆、敗レテ久米
莊安國寺ニ入り、自殺ス、

〔沙彌洞然長狀〕

一政隆様、一節（肥後兼北郡）二見^{（肥後兼北郡）}御逗留候て、八代みを御光儀候、如筑

州御渡海、已後於國中滅亡候、○上略

〔菊池家代々記録〕

後○肥政隆廿三代能運早世して子なし、依之（菊池）爲邦の甥肥前

守重安ろ子政隆を以て、能運跡を嗣し、免、二十三代乃屋形と號せ、然共菊
池家十同心せむ、永正二年十二月三日、八拾四人連判を以、阿蘇大宮司惟憲
は嫡子惟長（養子）養與とせん事を受によつて、惟長（龍胆カ）神を弟惟豊に譲り、其身菊
池家を嗣て武經と改む、政隆是をいゝつて、城隈部以下五百餘騎相まゝ（親指）
へ、武經と戰ふ、大友阿蘇大宮司なし、武經一味し、政隆を責む、政隆一戰に
利を失ひ、永正六年（人皇百五代）閏八月十七日、合志郡久米に庄安國寺よ
走り入り、腹切て死む、（系圖）十九歳（政隆）なり、

〔菊池軍記〕

三 菊池政隆與菊池武經合戰、付菊池家士誓書事

○上略、政隆ノ部下政隆ニ背キ、政隆これをいうけ、城六郎政元、隈部下野
武經ヲ迎フルコトニカ、ル、政隆これをいうけ、城六郎政元、隈部下野
守鎮治以下五百餘人を相うらひ、武經と戰し、豊後乃大友阿蘇大宮司

永正六年閏八月十七日

九三七

政隆能運
ノ後ヲ繼
グ家士武經
ヲ迎ヘテ
主トナス

大友親治
等武經ヲ
援ケ

城政元隈
部鎮治政
隆ヲ援ケ

永正六年閏八月十七日

九三八

おと、武經ヨ一味し、大軍をもけく政隆を責、政隆一戦ヲ利を失ひ、永正六年閏八月十七日、合志郡久米庄安國寺ヨ走入、腹ろき切く死にたる、○肥州古城考異事

國人武經ヲ怨ム

〔求麻外史〕

二之五 蓮心公第十四

永正六年 是歲、政隆與武經戰敗死、武經苛酷、國人怨之。

〔菊池總系圖〕

世系

能運 肥後守、從五位下、廿三歲ニシテ早世、儀天明綱

政隆 實菊池肥前守重安息、嗣家纔三月ニシテ、永正六年閏八月十七日、於安國寺自殺、十九歲

武經 肥後守、實阿蘇大宮司宇治惟憲嫡子、雖相續菊池家、後被追出

武包

〔菊池家代々記錄〕

後○肥 菊池家系圖

武運 肥後守 高來ヨリ歸住、後改號能運、號儀天（明綱カ）大居士、號又實相院儀天窓

心大居士肥

政隆 肥前守 重安息也、能運歸住後、無實子ニヨツテ、政隆ニ相續シ畢、

武包 肥後守 依無實子、詫（應）廣武安息ニ相續畢、

〔諸家系圖纂〕

藤十六上 菊池武家系圖

能運 肥後守、從五位下、年廿五卒

政隆 永正二年乙丑閏八月十七日、年十九、於久米原傷害、此代迄則隆以來卅三代

義國 菊池左兵衛督、自大友繼

〔菊池風土記〕

世系 北家藤原菊池系譜

重朝 二十一

能運 二十二

政隆 二十三

重安子、繼立三月、永六年閏四月十七日、合志郡安國寺ニテ自害、十九歲、法名天仙源祐居士、

法名天仙源祐居士

武經

始ハ惟長、二位阿蘇大宮司惟乘嫡子、國侍八十四人連判ノ誓書ヲ以テ申請、養君トス、依之政隆自害、武經後ニハ阿蘇大友ニ屬セス、逆意有テ沒落ト云、

武包 二十四

〔菊池軍記〕

七 菊池系圖

永正六年閏八月十七日

九三九

始メ政朝
ト稱ス
法名儀山
淨智居士
トノ説

永正六年閏八月十七日

九四〇

二十代

爲邦

爲安

重安

二十三代

始名政朝爲菊池養子相繼家督纔三月永正六年閏八月十七日於安國寺自殺十九歲法名天仙源祐居士廣福寺舊記曰政隆法名儀山淨智居士不知何是

二十一代

重朝

二十二代

能運

二十四代

武經菊池肥後守實阿曾大宮司字治惟憲嫡子永正二年十二月相續菊池家後被追出

〔阿蘇家譜〕六

惟憲 憲一本ニ乗ニ作ル

惟長

惟憲長子文明十二年生故老職ヲ襲キ從四位下ニ敍ス并ニ年月ヲ詳ニセズ永正二年秋菊池宗族巨臣其主政朝ヲ廢シ惟長ヲ立テ嗣トセント請フ惟憲之ヲ許ス十二月菊池氏臣八十餘人誓書ヲ以テ之ヲ迎フ是ニ於テ惟長職ヲ弟惟豐ニ讓リ隈府ニ入り菊池氏ヲ繼キ肥後守護トナリ名ヲ武經

武經

ト改ム既而之ヲ悔ユ略下

○政隆ノ部下政隆ヲ逐ヒ阿蘇惟長ヲ迎フルコト永正二年十二月是月ノ條ニ惟長政隆ト戰フコト同四年八月二十日ノ條ニ惟長隈府ニ入り菊池氏ヲ冒シ名ヲ武經ト改メ政朝筑後ニ走り名ヲ政隆ト改ムルコト同年十二月十三日ノ條ニ見ユ

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部キ之 菊池政隆

政隆

○廣福寺文書(肥後)
永正二年八月五日安堵狀

永正六年閏八月十七日

九四一

永正六年閏八月十七日

九四二

肥後

○相良文書(肥後十五) 十月十三日書狀

竹迫城

〔肥後國志略〕

中郷上ノ庄郡

竹迫ノ城迹

蛇ノ尾ノ城云、合志家傳當城ハ

齋院次官中原親能四男大膳大夫兼攝津守師員ト云者、建久年中、當國合志郡ノ地頭職ヲ賜リ、自關東下向ノ、當郡二子村ニ住シ、此所今世傳内村ト云、竹迫ノ城ヲ築ク、里俗上ノ庄ヲ本城ト云、原口ヲ新城ト云、師員ハ大友左近將監能直カ弟ニシテ、當國鹿子木、三池等ノ同姓、是合志竹迫氏ノ始祖也、○中永正二年閏八月十二月三日、菊池政隆ト同志隆岑等ト及一戰、政隆失利、久米ノ庄安國寺ニ

陣塚

〔肥後國志略〕

中郷合志郡

陣塚

永正六年閏八月十七日、菊池政隆ト阿

入テ切腹云々、永正年中、合志伊勢守隆岑住吉ノ館ヨリ當城ニ移ル、蘇惟乘長子惟長ト合戰ノ時、政隆ニ爲合力、玉屋三郎貞親二百ノ勢ヲ催シ來リテ、十六日ノ宵ヨリ屯ル所也、今呼テ陣塚ト云、惟長五百騎ヲ卒シテ、久米原ニ陣取、翌十七日巳ノ刻軍始リ、政隆終ニ討負、十九歳ニテ安國寺ニ入テ自害ス、委クハ玉屋系圖ニ有ト云、

〔肥後國志略〕

北郷合志郡

安國寺護法山 台宗叡山正覺院末寺、初ハ號

青原山壽勝寺、開山東明惠日和尙也、東明ハ大元定海人、俗姓ハ沈氏、天童直翁德譽禪師一作舉ニ嗣法ス、○中

安國寺

菊池政隆墓 安國寺祖師堂ノ後口數畔ニアリ、石塔ノ銘ニ天仙トアリテ、

文字消歇ス、菊池系圖ニ、肥後守政隆、初號政朝、實肥前守重安男也、菊池家廿二代肥後守能運早逝ニ依テ、繼其家ト云ヘ、有故永正六年、或說二年、異說云々、武經於久米原切腹也、於久米庄安國寺切腹、法名天仙源祐居士ト云々、里俗瘡ヲ病者、此墓ニ祈テ有驗、賽ニ乃チ菊池川ノ小石ヲ以ス、亦玉名郡石貫村廣福寺ニ在之、政隆ノ位牌ニハ、儀山淨智居士トアリ、系圖ニハ天仙源祐居

永正六年閏八月十七日

九四三

永正六年閏八月十八日 二十日

九四四

士トアリ、

〔肥後國志略〕

北郷大林村

尼寺ノ廢迹

昔日菊池肥後守持朝附箋ニ、系圖持朝討

政隆ノ妻
尼トナル

死ノ事不見四久米原合戰ニ討死ス、妻室不堪愁、久米村安國寺ニ來リ、七々

日ノ追善ノ尼トナリ、大林村ニ一寺ヲ建テ之ニ居リ、持朝ノ菩提ヲ弔フ、亦

扈從ノ女房三十六人、慕來リテ發心メ尼ト成リ、共ニ佛事ヲ勤行ス、其時渡
シ川瀬ヲハ三十六渡ト云、通リシ路ヲ菊池分ケ野、亦ハ六々野云シトカ
ヤ、又大林村ノ境瀬田村ノ上ノ原ニ菊池通リ野ト云所アリ、六々野トハ此
所ナルヘシト云、

十八日、丁未貞常親王ノ御子、胤覺山城妙法院ニ入室アラセラル、

〔嚴助往年記〕

上 閏八月十八日、妙法院入室、自勢州上洛也、

伊勢ヨリ
御上洛

〔伏見宮御系譜〕

覺胤法親王二品後柏原院天皇御猶子、妙法院教覺准后

後柏原院天皇御猶子、妙法院教覺准后

後柏原院
天皇御猶子
天皇后御門
子トノ説

〔華頂要略〕

百四十一 諸門跡傳

覺胤法親王 後土御門院御猶子、伏見

貞常親王息、母贈一品重有卿女、教覺弟子、

二十日、酉三條西實隆所持ノ妙音天像八景押畫等ヲ叡覽アラセラル、

洞院滿季
筆妙音天
像

〔實隆公記〕

一四十一

八月廿五日、乙酉、雨降暴風、

西山内府筆妙音天像、知

恩寺上人被惠之、自愛々々、

閏八月廿日、己酉、晴、中予所持之妙音天像、八景押畫等備叡覽了、

廿二日、辛亥、天晴、中略月次御樂ノコトニカ、妙音天尊像到、今日御樂、可

被置禁中之由申入之、今夕以重親被返下、畏入之由申入了、

二十四日、癸丑丹波守護細川高國、大芋兵庫助ニ、同國大芋社名田畠等ヲ安
堵セシム、

〔丹波多紀郡明細記〕

二 丹波福井組

福井村 九左衛門家藏

一 細川高國證券一通

丹波國多紀郡大芋社名田畠買得散在山林寺座別錄在等衰帶大心院殿

御判、當知行之上者、彌領知不可有相違之狀如件、

永正六年閏八月廿四日

大芋兵庫助とのへ○丹波志

二十六日、乙卯幕府揚弓戲アリ、

〔武雜禮〕

七十四 所載

於殿中御揚弓有之、永正六年閏八月廿六日御人數阿野殿侍從

永正六年閏八月二十四日 二十六日

九四五

細川政元
判物

御返却ア
ラセラル

參加ノ人
々々

永正六年閏八月二十七日

九四六

殿飛鳥井殿(細川高國)右京大夫殿房州(細川政賢)頭殿吉見九郎殿一色兵部大輔伊勢備中守同八郎(足利義政)仍御矢取事同朋衆ニ雖被仰出之公方様あそとさむい尤も御會所之同朋可取申之依東山殿様之御代よ(旨)ハ立阿取申候間也然こ今日御勝負御延引也

松平信忠三河稱名寺ニ土地及ビ地子錢ヲ寄進ス、

〔稱名寺文書〕河〇三

爲大濱稱名寺領陸町并地子寄進之事於子々孫々不可有違亂煩者也仍執達如件

松平左近藏人佐

永正六年己壬八月廿六日

信忠(花押)

稱名寺

二十七日辰三條西實隆備中金川城主松田元勝ノ請ニ依リテ其居城ノ名ヲ撰ス、

〔實隆公記〕一四十

閏八月廿七日丙辰陰自晚雨降〇中泰首座今日下向備

中云々松田城名事先日所望之間麗水玉松二書遣之了、

〔備中集成志大全〕七本

古戰場 備中之侍大將備前松田ニ與力而同國福岡之

麗水玉松ノ二名ヲ撰テ

玉松城

城合戰之事

一松田左近將監代々日蓮宗津高郡金川ノ城二之丸ニ一寺建立日向山妙國寺在法名〇中

右左近將監俗名代々孫次郎ト云金川城山ハ臥龍山玉松ノ城ト云、

是月豊原統秋義尹ノ爲メニ舞曲口傳ヲ撰進ス、

〔舞曲口傳〕

右舞曲説々依爲上意擇之所進上也、

永正第六曆閏八月 日 從四位下行前筑後守豊原朝臣統秋

丹波守護細川高國三寶院門跡領丹波所々散在ノ地ヲ押領スルニ依リ、

同門跡雜掌之ヲ停止セラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔三寶院文書〕五

〇山城

三寶院御門跡雜掌申狀(丹波)永正六年八月十日

當門跡領丹波國所々事(細川高國)紙在之去年以御下知守護方江數度雖被相屈終不能返答之條御迷惑次第也殊篠村八幡宮事者於御當家御揭仰之子細異于

永正六年閏八月是月

九四七

篠村八幡宮神領ヲ押領ス

他者哉、然神領押領之間、神役法會等既令闕怠、訖御武運長久御祈、當時別而可被勤修之處、剩舊例之祭事法事等、可令退轉事、太以不可然、雖然愛染供月次御祈且暮勤行等、以其屬于今被相勤者也、所詮重而被成御下知、爲上意直不被仰付者、難事行者哉、此等之趣具被申入、堅被加御成敗者、可爲御祝著之由候也、仍謹言上如件、

永正六年閏八月日

九月小 庚申朔

二日、辛酉得富八郎、大内義興ニ依リテ、右京進タランコトヲ請フ、

〔長防風土記〕

八十二 三田尻宰判 周防國佐波郡古文書三十三 防府東大寺領古文書五

右京進所望事、可舉申公家狀如件、

永正六年九月二日

(大内義興)
(花押)

得富八郎殿

○八郎、任官ヲ請フノ日詳ナラズ、今姑ク本文ニ據リテ、茲ニ揭書ス、

三日、壬戌新大典侍勸修寺藤子ヲシテ、大神宮ニ代參セシメラル、左近衛少將白川雅業壬戌亦參宮ス、義尹、雅業ニ馬ヲ遺ル、

〔實隆公記〕

四十 九月一日、庚申、晴、行水念誦如例、告朔幸甚々々、○中

新大典侍明後日參宮、自今夜被出精進屋(白川忠密)位(伯二)云々、

二日、辛酉、天晴、

早朝青女入風呂、新大典侍精進風呂也、○中今朝一桶荒卷二獻新大典侍精進屋者也、○中入夜爲新大典侍使、今御乳人(伊勢)來國司過書二百人外不可勘過之由申之、以外事也、雖然既用意之間、可有出立於路次、猶可加問答其

永正六年九月二日 三日

九四九

北島材親
過書二百
人ニ制限
ス

藤子精進
屋ヲ出ツ

永正六年九月五日

九五〇

間事内々可被仰北畠入道木造其儀内々可遣愚狀之由所存也仍則調置狀獻了
三日壬戌天顔快晴未明參宮衆進發也

鷹司兼輔
妻同伴ス

雅業俄ニ
參宮ス

白川家ノ
參宮容易
ナラズ

雅業從者
參詣ニテ
ノ體ニテ

新大典侍局御代上臈局若宮御方御乳人等也右大丞室同參詣云々今日念
誦看經別而致其沙汰道堅法師來伯二位來臨子息少將雅業朝臣俄參宮云

々室町殿賜御馬云々珍重々々彼家就職參宮之儀不容易七八代無參宮之
儀祖父入道落髮後密々參宮被衣ニテ拜見之由語云々而今少將當職以前

也不及沙汰哉一僕之體不可說一向兼以不知之條言語道斷之由演說者也
七日丙寅晴略中

今日新大典參宮侍見之之當日歟天氣快晴珍重

十一日庚午天晴略中

彼御參宮之儀關所以下無煩明日可有還向之由世尊寺行季朝臣歸京申云々珍重

十二日辛未天晴略中略幕府觸穢ノコトニカ
今夕未下刻參宮人々還向也

無爲無事珍重々々

〔拾芥記〕

中

九月三日天晴新大典侍局爲御代參參宮也

五日甲子前關白一條冬良宸筆詩歌懷紙ヲ土佐國司一條房家ニ遺ランガ

關所以下
煩ナシ

參宮ノ人
々歸落ス

爲メニ三條西實隆ニ就キ之ヲ賜ハラシコトヲ請フ

〔實隆公記〕

一四十四

九月四日癸亥陰及晚雨濺則霽略中

自一條前關白有消息宸筆詩歌御懷紙所望可下土佐云々一條房家

五日甲子霽入夜雨降略中

勅筆詩歌御懷紙申出之遣一條前殿下又詩御懷紙一予申出之以前聖武天

皇宸筆進上之者所望由信賢房申間可遣之也

七日丙寅幕府觸穢

〔實隆公記〕

一四十五

九月七日丙寅晴略中

抑室町殿卅ヶ日穢云々一色兵部大輔產子逝水之故云々

十二日辛未天晴略中

自阿野有使者武家觸穢事自今夕御混合之儀内々仰之旨申含伯二位了其

趣可得意云々尤可然之由申了則伯二位來示同旨所詮御代官還向御祓御

頂戴之後混合可然之由申入云々尤可也雖穢中祓頂戴并清淨於一身之祓

者可用之由彼卿談之爲向後才學記之

三條西公條若宮ニ物ヲ獻ズ

永正六年九月七日

九五二

實隆亦詩
御懷紙ノ
下賜ヲ請
フ

三十箇日

觸穢中ノ
祓

永正六年九月八日 九日

九五二

〔實隆公記〕一四十 九月七日丙寅晴○中

今日相公羽林一荷兩種令進上宮御方則參候青女又參入有一獻云々、

八日、邦高親王、三條西實隆ニ物ヲ賜フ、

〔實隆公記〕一四十 九月八日丁卯天晴○中

自伏見殿梨子一枝賜□、

○コノ後親王、實隆ニ物ヲ賜フコト、便宜左ニ合致ス

〔實隆公記〕一四十 十二月七日甲午天晴風靜○中

自伏見殿御樽代百疋送賜之、不慮御沙汰畏申者也、

九日、辰重陽節句、詩歌及ビ著到百首和歌御會、

〔實隆公記〕一四十 九月三日壬戌天顔快晴○中

及晚有女房奉書重陽詩歌題事并著到和歌可令詠進哉否事被仰下之彼狀

續左○書狀所

五日、甲子、霽、入夜雨降○中

及晚世隆寺元長卿來臨御著到相公羽林可詠進之間事也、加奉了、重陽詩題同到來、

八日、丁卯、天晴○中

樽代百疋

梨

三條西公
條ヲシテ
詠進セシ
メラル

實隆ニ著
到和歌籤
上銘ヲ書
ルカシメ
邦高親王
御參内

實隆懷紙
ヲ進上ス

實隆御製
ヲ拜見ス

實隆御製
及ビ御詠
草ヲ拜見
ス

著到和歌籤、可書進上銘之由被仰下、則染筆進上了、

九日、戊辰、天晴、嘉節幸甚々々○中

志願松殿三位來、甘黃姉三品冷泉三品等著到歌等被談之○中及晚參内、先於宮

御方、有小飲事、小時依召參御三間著到和歌書之、其後有御盃事、二獻、女中陪

膳也、事終後、伏見殿御參、漸可有御祝歎之間退座了○中今日兩席懷紙進上

之、相公同進上之、

十五日、甲戌、晴○中

禁裏御著到書進上之、

十七日、丙子、天晴、梳髮、

御著到御製拜見返上之、

廿八日、丁亥、霽、

早朝御著到歌書進之、

十月廿三日、辛亥、晴、

著到和歌書進之、御製御詠草拜見之、

廿九日、丁巳、晴○中

永正六年九月九日

九五三

永正六年九月九日

御著到今日書進上之、

十一月五日癸亥雨時々降禁裏著到和

十九日丁丑宿雪晴禁裏御著到書進上之、

〔實隆公記〕

二〇永正六年十一月

五首ヲ詠
進セシメ
ラル

〇上略御神樂ノコトニカ、御ちやくさうおほくの御つもりよてまつ五
しゆのふんあそひし候へく候よきやうよ申され候へく候御うれしき事
よていらせをのしまし候へく候あすのうからす御ほしめし候よしよく
申とて候このよし御心え候へく候うしく、

されよてもの御局へ

〔實隆公記〕

一四十二月十二日己亥晴

著到和歌今朝書進上之、

十八日乙巳晴

〇中略

著到和歌今日書進上之、

十九日丙午雨降

〇中略

抑御製御詠草拜見有女房奉書委細愚報申入之、

女房奉書

終功

祇候ノ人々

々ふの日時さよめのちんのきめてさく御得しめし候、
一日ノ條ニ見ユさての御ちやくさう、
はつ并よ一しゆよても、
さ并あき御事ともよて候つるよ、
うらよて、
ぬ御うれしき、
夕うさやとよ、
をこし御得しめし候よし、
しく、

ゆハされよてもの御局へ

廿日丁未陰晴不定、

今日著到和歌被終其功仍晚頭參内、
林同道則書御著到、
相公羽林候御陪膳、
新中納言冷泉宰相、
四辻宰相中將伊長等候之、

了、
言綱朝臣等役之、
兵部卿大藏卿、

永正六年九月九日

永正六年九月九日

九五六

此外冷泉大納言、小倉大納言(季博)、姉小路宰相冷泉三位、康親朝臣雅綱(飛鳥井)、下姿參仕、

三獻天酌
百首清書

於殿上有盃酌云々、百日無爲無事珍重々々、
三獻天酌也、三獻共以予賜天盃了、時宜快然、珍重々々、木阿來、百首清書來、

廿二日、己酉、天晴、略中

姉小路一荷兩種送之、御著到無爲祝著之由謝送之、自德大寺有返札、

〔禁裏御著到百首和歌〕

○永正六年
公爵三條公輝氏所藏

春二十首

著到百首
和歌

御製 後柏原院

年のうち此雪もき取くは梓弓をして春さゆ々々の春風

實隆

實隆

春あすまたてるや同じ年はおくこあさかあさにくきてみまらん

冷泉政爲

政爲

よの中り年あえぬへきとひりれやうにふちくる春の色哉

姉小路濟
繼

濟繼

いよしへもいうにいとんと一年をたどるに同じさふの春う取

野外朝霞

作者次第已下同

朝戸出の野をりう庵よ世の春の霞も袖よ露ふりぬらし

やされゝや霞の袖もあを雪に又吹あへま峯のさる風(朝)

野へのまゝ行人見えぬ朝からきうすま乃外のうまやあうらん(袖)

のへあほさうれふ乃草の朝霜よ霞の色もむまやれつゝ○以下、海上

霞山居子日水郷若菜春鶯呼客水消田地南北梅花露暖梅開春鴈離々獨見

春月閑中春曙柳無氣力旅宿春兩行路春草山寒花暹花下送日落花入簾桃

花曝錦留春不駐ノ十
八題七十二首略ス

羈旅更衣

えられこし山を衣うへまくもたしといとしさふを待えて

せちうへて衣手涼し山風もろふれり縁よ心して寄け

露けさのうへてやまさる旅衣野山乃春の忘れうさみよ

時しあせのなふこそうへめ夏衣旅のやつれ袖あらまとも○以下、花何

在、人傳郭公、寢覺郭公、蘆橋子低、民戸早、苗、袖、五月、雨、湖、五月、雨、鵜、船、廻、島、連、略

照射里蚊遣火、閑庭罌麥沙、月忘夏、野亭螢火、晚夏、蟬聲ノ、十四題、五十六首、略

幽栖秋來

永正六年九月九日

九五七

去られしの淺ちう奥のをとつせもひとあらしは秋の初風
いほとあく心よりをく露をこそなへて乃秋もやとくくらん
思ふとも花よのさあし草乃とれ色をも(またぬい)秋のきにたり

とちとて、思ひし道の草葉よもさのらぬものう秋のきにたり○以下
逢織女惜別夜深開荻萩花藏水女郎花露風動野花鹿聲何方秋夕傷心遠天
旅鷹橫峰待月明月如晝十五夜月雲間稻妻名所搗衣霧中求泊伴菊延齡霜
草蟲吟紅葉出垣山路秋過ノ十九題七十六首略ス

初冬落葉

神あひの杜あつふこそ冬乃色よりねてうつろふ一葉たまらて
ひととにもたどろきそめし秋の風とらひつくして冬にきになり
冬來ぬとけさ吹風や秋よちる木のとれ庭を又うつむらん
宍ゆの色におもひよなする木々れとの名殘なきまでなふの散たり○以下
雨寒草處々濱邊寒蘆月照網代連日鷹狩薄暮千鳥水留水聲寒聞五十六首略
馴船雪中殘雁眺望山雪雪埋苔徑爐火似春老人惜年ノ十四題五十六首略
ス

忍不言戀

おもひあまり隔らぬ人よや中く／＼にこのまかさりれ心見えまし

思ふとて心泣つくも言れとの隔りし物からあさにちらさし手な
あたりあらの人やとえるとこのうりにいとてもえやの山の并れ水
外よりれえあむ色とこのせとや我あらはさの淺き思ひを○以下
戀歎無名戀相互忍戀不堪待戀臨期變戀時々驚戀憑誓言戀深更歸戀後朝
切戀逐日増戀悲心離戀見形厭戀披書恨戀絶經年戀ノ十四題五十六首略
ス

殘月越關

越やらてまゆやまらんの在明の月のこあさ乃隔ふ坂の山
あへり見る都乃月れよぬあし鳥乃音れしめあふ坂乃山
あうてゆくこれ心とさし哉關の木末乃月れ明々の
隔うてゆく都乃けさの面影も月よ程取き隔ふさう乃山○以下
夢嶺林猿叫翠松遠家山人稀野寺僧歸田家見鶴樵路日暮晴後遠水滄海
雲低漁船連浪江雨飛鷺夜泪餘袖憂喜依人竹契遐年ノ十四題五十六首略
ス

十三日、壬申、和泉旭蓮社周瑛ニ香衣著用ヲ聽サル、

〔實隆公記〕一四十一 九月十三日、壬申、霽、略、中

抑泉州南庄旭蓮社、觀音院等流云々、周瑛香衣事所望、般舟院惠什傳達之間、

永正六年九月十四日

九六〇

今日内々付勾當内侍披露、勅許、一返事被仰右頭中將云々、
十五日、甲戌晴、旭蓮社周瑛上人來臨、今日爲御禮參内、御對面云々、段子
紅一端、杉原十帖被携、不慮之芳志也、

十四日、西幕府、山城梅津莊陽寧院分内開發田及ビ西院莊等ノ地ヲ、同國
長福寺ニ安堵セシム、

〔長福寺文書〕四山城

御料所城州梅津庄陽寧院分内開發田地貳町三百步、并西院庄内壹町九段
半等事、禪源院退轉之上者、雖可令勘落之、連々可被再興之由、以知足（折力）、
之條、先年任寄進狀之旨、彌領知不可有相違者也、仍狀如件、

永正六年九月十四日

（母）貞陸（花押）

長福寺

○幕府、長福寺ニ、梅津莊等ヲ寄進スルコト、明應五年十一月二十七日
ノ條ニ見ユ、

大内義興、周防榎野莊ヲ東大寺ニ還付ス、

〔實隆公記〕四十 四月十四日、乙亥晴、略○中

信花坊彼國衛還補祝著之由申送之、榎野事堅可有催促之由、入魂了、

廿一日、壬午晴、略○中

今日以書狀、榎野庄事申遣問田大藏少輔了、他行云々、

廿七日、戊子晴、略○中

遣書狀於問田大藏少輔、榎野庄事申遣之、

卅日、辛卯晴、略○中

榎野庄事書狀書遣之、

五月七日、戊戌天晴、略○中

龍崎中務丞道輔來、帛一束携之、勸一盞暫言談、防州榎野庄事委細演說了、

卅日、辛酉雨降、及晚霽、略○中

西春來、榎野三代官書狀持來、所詮未進分事、猶以難澁之躰也、猶可加問答之
由報了、

〔實隆公記〕四十 閏八月廿七日、丙辰、陰、自晚雨降、略○中

信花坊來臨、周防國衛事落居云々、榎野事猶可申達之條相談之、

廿八日、丁巳雨、土用事○中略

永正六年九月十四日

九六一

永正六年九月十四日

九六二

遣書狀於問田許、樵野事催促之、有返報、

廿九日、戊午、晴、

早朝(勅解申小略)在重朝臣來、就樵野庄事調愚狀遣大内左京大夫許、旨趣彼朝臣委細可致媒介之由、命之、

九月二日、辛酉、天晴、○中

在重朝臣來、樵野庄事、所詮在京中者、難致其沙汰之趣顯然也、不堪言語者也、雖然猶以書狀申遣問田許、

五日、甲子、霽、入夜雨降、○中

今日遣書狀於龍崎許、樵野事又宜返答也、

十一日、庚午、天晴、○中

信堅坊來、樵野庄事、問田有申旨、猶可加問答之由報了、

十二日、辛未、天晴、

龍崎送使者、謝昨日之使者事、樵野庄大略落居之旨示之、猶自是可申旨等、

十四日、癸酉、天晴、

抑樵野庄事落居、問田請文到來、西春持參之間謁之、明日可下向南都云々、條

實隆義興
ヲシテ勤
解由小路
在重ト謀
ラシム

義興在京
中ハ沙汰
シ難シ

大略落居

弘胤請文
到來ス

々申合之、勸一盞、

十六日、乙亥、天晴、

遣使者於問田并龍崎、謝樵野事、

廿日、己卯、晴、○中

問田有使者、樵野庄事等相謁申之了、

十一月廿四日、壬午、天晴、○中

今日遣重種朝臣問田大藏少輔許、樵野庄事催促之、他行云々、龍崎問此事、以書狀催促了、

十二月一日、戊子、天晴、○中問田有使者、樵野庄事也、

十二月二日、己亥、晴、○中

今日於使者於所々樵野庄催促事、問田、龍崎等申送之、

〔實隆公記〕

月○永正六年九月一日裏文書

其後不申承、積鬱何日可得參會之便候哉、不斷御床敷候、抑東大寺領國衙事、今度嚴重沙汰之次第、誠御祈禱專一珍重候、就其樵野庄事、最前御許容第一之條目候間、已落居之由存候處、于今愁訴之一途滯停候云々、言語道斷候、此

實隆書狀
案

永正六年九月十四日

九六三

永正六年九月十五日

九六四

事無落居者、西室奉行事爲寺門可召放候、然者愚老忽失面目之子細候、進退
惟谷候、且者御念比之事あと及承存□□候處、去春以來至今同篇候、使節も
退屈之躰候、外聞之儀迷惑候、きと嚴重之成敗所仰候、所詮彼三代官已下者、
連々不法虚言絶常篇、巨細之段

今日請文あと

候ても、寺門更不可用之候、此特別而問田方とさ訴人候ても、請人とも被置
候て、嚴密沙汰候次第、念比被仰合、來納事の不可及申候、未進之條々急度
寺門致領納候様と、不日辨濟之儀被仰付候者、所仰候、○實隆書狀

○義興、東大寺ニ、同寺領周防國衙ヲ還付スルコト、四月十三日ノ條ニ
見ユ、

十五日、甲戌幕府、齋藤藤壽ノ、山城上御靈社領河内金子一郎跡ノ地ヲ押妨
スルヲ停メシム、

〔御靈神社文書〕○山城

上御靈社領河州志起（起）郡金子一郎跡事、當知行之處、押妨云々、太不可然、早可
被停止其妨由被仰出候也、仍執達如件、

永正六
九月十五日

貞勳(花押)

之秀(花押)

齋藤々壽殿

十七日、丙子僧宗百古嶽ヲ大德寺住持ト爲ス、是日、入院、勅使萬里小路秀房之
ニ莅ム、

〔實隆公記〕一四一 九月十七日、丙子、天晴、○中略

今日大德寺入院云々、勅使秀房借笏之間遣了、（萬里小路）

〔辨官補任〕下 右少辨正五位下同秀（藤）一（房）十八、藏人、十二月廿三日敍正五位

上、九月十七日大德寺入院勅使、

〔大聖國師古岳大和尚道行記〕

永正己巳九月十七日應綸命而視篆本寺、嗣法香語末云、靈山祖後入開山國（宗隆妙題）

師室中、收拾片木頭、遍界不曾藏、六傳而至吾老漢、々々祕在、持來密付山僧、山

僧懷之年久矣、即今拈出、分作二分、一分欲奉靈山祖、々々爲我太賒、不如一

齋、插向一爐、奉供養靈山六傳的葉、前往當山、特賜佛宗大弘禪師實傳老漢云

々、法筵之盛、可視焉、端居丈室、近傍者少、禪餘栽珍樹、移怪石、以作山水趣者、猶

如靈山和尚所謂先聖後聖一揆耳、惠林相公源朝臣義植、一條黃門藤原朝臣

永正六年九月十七日

九六五

永正六年九月十七日

九六六

房冬、三條中將藤原朝臣公兄、其餘大家高官傾心問道者不暇枚舉、抑亦遐迹(通)
道俗男女、戴衣孟以爲勝因、提公案以明玄旨、瞻望師之體裁、逢貴施辛辣、逢賤
垂慈誨、不意法運之季、復觀本色鉗鎚、○上
下略

〔龍寶山大德禪寺世譜〕七十古嶽 諱ハ宗亘、實傳真(宗真)、五十二嗣、○中 永正

大仙院ヲ
創ム

六己巳九月十七日、勅ヲ奉ノ入寺開堂、大仙院ヲ創ス、○龍寶山志
異事ナシ、

〔五岳前住籍〕龍寶山大德禪寺住持位次

七六古岳諱宗直(意)、特賜正法大聖國師嗣法實傳、
天文十七戊申寂壽八十四

筑後守護大友義長、草野興秀ヲシテ、筑後山本郡、三井郡、三原郡等ノ内
ノ地ヲ知行セシム、

〔草野文書〕後○筑

筑後國山本郡、三井郡、三原郡、下妻郡、三瀨郡、竹野郡之内坪付別帶、任御判
之旨、所渡進也、全可有知行、仍執達如件、

永正六年九月十七日

右馬頭親賢(花押)

草野太郎殿

三瀨郡ノ
内大隈

筑後國上三瀨郡之内大隈五町五反、爲打替、同郡之内大犬塚十二町之事、任
御判之旨、打渡申狀如件、

永正六年
潤八月廿四日

右並(花押)

草野殿

筑後國三原郡、竹野郡内坪付別紙、任御判之旨、所渡進也、仍執達如件、

永正六年潤八月廿七日

右馬頭親賢(花押)

草野長門守殿

(大友義長)
(花押)

草野太郎知行分

筑後國之内草野中務少輔申本新望之地事、山本郡庄一圓、竹野東郷伍拾肆
町、竹野西郷之内綾野七ヶ名、三井郡之内北野貳百五拾町、同郡之内下阿志
岐肆十町、同郡石崎十二町、大城八十町、三瀨郡内白口拾貳丁、草野本名之内
枝光六町、高野拾八町、竹野郡之内三明寺三拾丁、禪院九町三段、隈大力拾六

永正六年九月十七日

九六七

永正六年九月十七日

九六八

町、竹野郡末吉三町、平三丁、秋月持留知之内、以前判形之前櫛原八十町、并大隈六町、國府六町、今亦秋月持留之内、會利八十町除之殘分一圓事、爲本河百伍拾町代所充行之者也、仍狀如件、

文龜二年三月三日

- 一所赤司三十町并散在加之
- 一所江戸肆十貳丁
- 一所西村拾貳町
- 一所德次拾貳丁
- 一所矢益十二町
- 一所乙丸拾貳丁
- 一所小松名十二町
- 一所加田九町
- 一所乙石六丁
- 一所矢留三町
- 一所方司九町三反

- 一所之さり柳壹町
 - 一所藤木六町
 - 一所月成三町八段
 - 一所河北市場壹町
 - 一所仁王丸拾九町
 - 一所經持廿五町地頭分
- 下妻郡内
已上

永正六年正月廿四日

十八日、丑和漢聯句御會、

〔實隆公記〕

一四一 九月十八日、丁丑天晴、

行水念誦、朝飧之後參内、聯句御會也、(實隆親王)中書王、(富勝軒)宗山、(東坊城和長)大藏卿、(三條西公條)相公、(金比呂長)羽林、(五條)式部大輔、(中山)爲學朝臣、(中山)康親朝臣、(執筆)秉燭之後終功、中間於常御所庇有御小漬、(白川)中書王、(高倉)宗山等御請伴申了、(白川)雅業朝臣、(高倉)範久等役送、

菊後梅何日、式部大輔

楓間花似晴、宗山、

永正六年九月十八日

九六九

參仕ノ人
々々
執筆中山
康親
役送白川
雅業高倉
範久

十九日、戊寅東大寺勸進盛憲榮俊ノ請ニ依リ、僧眞惠ニ上人號ヲ授ケ、念佛ヲ弘通セシメラル、

〔實隆公記〕一四十一 九月十九日、戊寅晴、略中

故眞盛上人弟子眞惠房上人號事、盛憲榮俊上人懇望之間、此事内々申入之、略中
及晩彼上人號事、勸許之趣有女房奉書、續左、二十日ノ條ノ女房奉書ヲ云フナラン、

廿日、己卯、晴、略中

榮俊上人來、彼上人號一返事申遣秀房、則到來之間遣彼上人了、略中

女房奉書

眞惠ハ眞盛ノ弟子三條西實隆ヨリ内々申入ル

上人號ノ許可ハ勸進ノ便宜シトナルベ

玄ん惠上人うの事申入られ候へ、このさくひのさやすくなされ候
のぬやうは候へども、これの玄んを以上人さしうよふそくのてしよて
候うへ、このさひのくむんしのたよりよもなり候へきよて候へ、東大寺講堂及三三僧坊等造營ノヨリ、四月十三日ノ條ニ見ユ、へつして御ささ候へんするとおほしめ
し候、さ候へ、まくにひてふさに御心得候ておほさつらむされ候へく
候、又この御くむるし、やうて又てんをりられ候やとよ、御らんし候
へく候、この月の御さいまいり候よし申とて候、は事よけさの御のこり
おやさ申つくしうさくおほさをおほしはし候、ふうく御所の御事御玄

あん候へく候、よく御心え候へく候、うしく、

されよてものお局へ

繪旨

念佛弘通事、繼故眞盛上人之遺塵、宜致十方之勸化者、天氣如此、悉之以狀、

九月十九日

秀房也、表番書名字、右小辨判

眞惠上人御房

廿一日、庚辰、天晴、略中 眞惠上人來臨、表禮有折昏、更以不可然之由再往辭之、

眞惠實隆ニ謝ス

雖然勸進上人預置歸之間、先重而自是可遣也、

邦高親王、隱居センコトヲ請ハセラル、

〔實隆公記〕一四十四 九月十九日、戊寅晴、午時詣勾當内侍局、伏見殿御隱居沙汰、

内々可伺御氣色之由、昨夜勾當被命之間、件事申談之、

○親王隱居セラル、コト、詳ナラズト雖モ、本書ニ據リテ、姑ク掲書ス、

二十日、己卯山城三寶院門跡雜掌、勸解由小路在重ノ、同門跡預醍醐御陵ヲ違亂スルヲ幕府ニ訴フ、

〔三寶院文書〕〇五 山城

永正六年九月二十日

醍醐御陵ハ門跡管領ナリ
醍醐十保ハ三寶院門跡所管ナリ
在重御陵ヲ競望ス

永正六年九月二十日

(增裏書)
御陵方

三寶院御門跡雜掌重申狀

永正六年九月二十日

九七二

三寶院御門跡雜掌重而謹言上

右醍醐御陵不混諸陵子細如先度委細言上被寄附當寺之證文承平四年之傳宣明鏡也○醍醐寺ヲシテ後山階陵ノ陵戸係丁ヲ領セ惣而醍醐十保之事者當門跡御管領也代々御判等嚴重之儀在之仍此陵之保十保之隨一也爰先年在(勸解山小路)通令競望醍醐御陵掠給御下知事古今始也依驚存歎申處仁則被成返御下知訖既當御代御成敗之上者無紛者也然仁尙號在重本領而匪啻企濫訴剩寺院年來知行者非分之押領云々言語道斷次第也從往古之寺田於在重押妨曾無謂其故者滿寺晝夜之勤行四海安全之懇祈兼亦奉廻向延喜(醍醐)朱雀村上三代之御菩提外更諸陵頭捧禮贊儀無之特當月廿九日爲天皇正御國忌衆徒悉令參詣御廟所江事每年不怠之法會也迄于土民等皆以令存知稱御陵不可有其隱然而當年可退轉哉愁歎有餘者也

御陵詣

延德二年

一延德二年兩方捧訴狀理非之段達上聞醍醐寺仁被返付處一方向之御沙汰云々前代未聞儀條々恣解狀也

一去年可置所務於中之御奉書事十月中旬到來也然間其以後不寺納處仁構虛言中間狼藉之由申掠條以外濫吹之至也

一右大將家御判等儀雖種々言上強不可爲當所支證何可及御許容此等趣被聞召分爲蒙御成敗重而粗言上如件

永正六年九月 日

〔三寶院文書〕

五十二
○山城

(增裏書)
御陵方申狀

三寶院御門跡雜掌申

醍醐陵事數篇雖申明猶在重不停競望條重而令言上者也抑醍醐十保事從承平宣下以來一日他人知行無之況哉陵保事者爲十保第一在所於號醍醐者也然於號被任陵頭諸國陵爲准據企訴訟事且者可謂傍若無人哉當寺由緒勝他門事雖不珍子細以事次爲達上聞具申入者也建武比等持院殿被辭(是利義民)帝都節於醍醐寺當門跡一院爲御方令沒落然間爲家來之輩不殘一人其跡令追却其後等持院殿有御入洛而御當家于今御繁昌事併賢俊僧正依懇忠御事也無隱于世者哉其時一寺又令沒落訖然而永爲座主可被專寺務之由

在重競望
ヲ停メズ
醍醐十保
ハ承平宣
下以承平
三寶院知
緒三寶院
由行

永正六年九月二十日

九七三

明應以來
濫訴ヲ企
御陵ヲ失
ハハ一山
滅亡セシ

蒙勅宣于今無相違者也其砌寺門歷代證文等令紛失訖雖然當門跡事公方
樣御代々御崇敬異于他之間院領等爲他家一切違亂無之然者等持院殿以
來他競望不及其沙汰之處去明應之比當御代初而企濫訴掠給御下知事且
者非輕上意哉所詮彼御陵事者醍醐寺爲隨一處今更於改替者一家滅亡此
節也定寺僧等悉可及離山然者退法務可被及隱遁之外無別儀之由深被申
歎者也宜被加御成敗者公私可被目出者哉仍言上如件

永正七年五月日

〔三寶院文書〕

〇山十八城

御陵事可有御中分之旨被仰出候哉迷惑此事候然共爲上意上者免角非可
申入之儀候但御請文事者可申入樣無之候其子細者御陵田申事未承及候
開闢以來今度始候間可爲何田地候哉各無其覺悟候先度在重令違亂方境
分候者一向當寺及關所被成候歎存候直樣爲寺務樣御申沙汰可被目出候
關〇以下

〔實隆公記〕

二四十

永正七年四月卅日乙卯晴〇中

在重朝臣來醍醐御陵田事三寶院有違亂去年三月被成勅裁〇醍醐諸安塔
院ノ訴ニ寶

就キ三條
西實隆ニ
諸ル

月十四日ノ條ニ見ユ其間事自然可申驚之由申之則相公當番參入之次申
入了

〔實隆公記〕

三四十

七月八日壬戌晴〇中

自三寶院有使者醍醐御陵田在重朝臣相論子細右筆奉行各獻意見之處猶
公家方可被尋決之由上意也便宜之儀可加芳言之由也雜訴事等更非口入
之限其上不可預顧問歎更無覺悟之由申之了在重朝臣又來上件三問三答
申狀等持來之一見了更以非愚慮之所覃者也

十二日丙寅陰夕立〇中

及昏師象朝臣來醍醐御陵領三寶院訴陣間事武家御尋子細語之宗碩祕計
事貳百疋到來四子

廿二日丙子天晴

時元宿禰師象朝臣兩人來醍醐陵田相論事兩方證文携之可申意見之由內
々武命也

一條前關白西園寺前右府下官此三人顧問衆云々太相國依目所勞不及仰
云々兩方證文等粗見之所詮此事愚拙非商量之限更無分別之由內々以奉

永正六年九月二十日

九七五

小槻時元
等實隆ノ
意見ヲ徴
ス

幕府子細
ヲ顧問ス

三寶院訴
訟ニ就キ
公家ノ意
見ヲ徴セ
ントス
實隆覺悟
ナシ

永正六年九月二十一日

九七六

行可申入之由、報時元宿禰了、此上重而有仰之旨者、其時可述愚意也、桃花者(一條冬貞)昨日兩方意見狀寫留之、追而可申入之由被申云々、西園者所勞之間、明後日邊可參之由被報云々、

廿七日、辛巳、雨降、○中

師象來、醍醐陵田申詞清書、落字等可見合之由也、一見無子細之由報了、

〔實隆公記〕

五十四 永正八年十一月廿七日、甲戌、晴、○中

在重朝臣諸陵田再興事、今朝談之、可相談廣橋之由返答了、

○幕府、醍醐御陵ヲ、三寶院ニ安堵スルコト、十七年十月二十六日ノ條

ニ見ユ、

二十一日、庚辰幕府、山科言綱ヲシテ、禁裏御料所内藏寮領山城鳥羽口率分ヲ安堵セシム、

〔東寺百合文書〕

○ニ山城一之二十五

(禁裏書) 禁裏御料所内藏寮領奉書之案文

禁裏御料所内藏寮領鳥羽口率分事、爲直務專朝役、早任先例可被領知之旨、被成奉書於山科家訖、宜被存知其段之由、被仰出候也、仍執達如件、

永正六
九月廿一日

(秀秋判)
信祐判

東寺雜掌

上杉顯定、毛利元賀二地ヲ與フルコトヲ約シテ、越後三條城ヲ攻メシム、

〔毛利安田文書〕

○羽前

(元賀)

三條要害事、以其方行、至于令落居者、大槻庄并平賀伊勢松跡事、不可有相違

候、謹言、

九月廿一日

(上杉顯定)
可諱(花押)

○本書宛名ヲ闕クト雖モ、裏書ニ依リテ揭書ス、又顯定、平子房長ヲシテ、越後杉一揆ノ徒ヲ糾合シ、忠節ヲ勵マシムルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、

二十二日、辛巳義尹、精進ス、

〔實隆公記〕

一四十一 九月廿二日、辛巳、天晴、○中

永正六年九月二十二日

九七七

大槻莊平
伊勢松
跡賀

永正六年九月二十三日

九七八

室町殿自今日御精進也、可有御斷酒之由雖有仰申留之了、御茶湯可被付雲(實錄)
龍院也、隱密之儀也、御懇志之趣語之云々、誠以御懇志殊勝事也、

二十三日、壬午、義尹、紅葉枝ヲ獻ス、仍リテ、御製ヲ義尹ニ賜フ、

〔實隆公記〕

一四十一 九月廿三日、壬午、晴、及晚雨降、入夜晴、

早朝以書狀申遣阿野之處、既出仕云々、其後爲御使參禁裏之由稱之來臨、
略只今自室町殿被進上紅葉枝云々、御返事被遣御製云々、有御談合之儀、

今川氏親、駿河寶樹院ニ、同國內屋郷内佛光寺田及ビ番匠給等ノ地ヲ安堵セシム、

〔駿河志料〕

七十八 古文書

竹若菩提所

竹若御科御菩提所、駿河國寶樹院領之事、將軍家安堵停止諸公事、
御判

駿河國內屋郷之内、佛光寺田、并番匠給之事、
範忠在判

一當寺領臨時諸役閣申之由、
範忠在判

一堀内道場建立地、永代所令寄附、并門外空地、南者限井川、西者限柴屋、東垣

通地者、限長寶寺、同在判

一本堂地所替仕候者、爲地替可有契約事、

堀内道場建立地

本堂替地

向笠文太夫跡

一文太夫跡之内、寶樹院領買得地之事、

一寶樹院領所々依賣置寺家退轉之由、買主無用捨、如本被買付事、
右、任先證而領掌可有相違者也、

永正六年九月廿三日

氏親花押

寶樹院

一寶樹院領駿河國內屋郷之内佛光寺田、并番匠給、同大岩郷内、
御寄進、院殿、紺免、同下嶋道場田、
慶壽寺、殿寄進、井宮、同上足洗之郷壹石、
長慶寺、殿寄進、瀨宮、殿寄進、并馬淵御堂屋敷、
貳段、向笠文太夫知行内壹町、當府内寺中屋敷、玉屋屋敷等云々、

一寺田 本田四町參段、此内參町三段、不作、限作壹町斗代壹石、

一井宮 神地斗代八石、

一上足洗 本田壹町、此内五段、不作、現作五段斗代壹石五斗、

一大岩 壹町斗代三石、

一紺免 本田陸段半、現作四段半斗代九斗、

永正六年九月二十三日

九七九

寺田 井宮 上足洗 大岩 紺免

永正六年九月二十三日

九八〇

瀨宮

駿府寺中

長沼郷ノ

買得下地

馬淵御堂

本堂替地

大屋郷内

窪道場屋敷

一瀨宮 沫段斗代壹石貳斗

一當府寺中 付玉屋敷今取流畢殿在判

一長沼郷内壹町壹段大 此内屋敷貳石四斗

買得下地分

一馬淵御堂屋敷 貳段斗代六斗

一向笠文太夫知行内 壹町斗代壹石

一本堂地地替事 四段小沓谷郷之内

一大屋郷内貳町 進別紙判形在之

朝比奈太郎契約并近付被官等屋敷事者年中三ヶ度ニ以地子可有沙

汰事

一同地之内本宿一本屋敷事 内屋郷内以宮

齋藤加賀守契約 原方爲改替

一窪道場屋敷事 南安東之内三御

岡部次郎契約 前貳段小西地替

一庄安西郷之内田地貳町壹町新田事 性安位牌田永正十年十月十一日別紙判形在之

右於有先證者任之訖并朝比奈岡部齋藤屋敷事者今以改替所相定領掌不可有相違之狀如件

永正六年九月六日

氏親(花押)

二十八日丁亥後土御門天皇聖忌御法會ヲ伏見般舟三昧院ニ修セラル

〔實隆公記〕一四十一 九月廿七日丙戌霽時雨降

終日念誦法花經一部金剛經等讀誦之奉祈先皇御菩提者也

廿八日丁亥霽略

雲龍院來臨今日室町殿御作善事行理趣三昧云々

今日聖忌於般舟三昧院有御經供養御導師光什僧正著坐公卿甘露寺中納

言

殿上人雅業朝臣六位可尋奉行職事右頭中將實胤朝臣御願文章章長卿清

書行季朝臣

十月二日庚寅霽略

禁裏御精進解女中各申沙汰云々兩種一桶進上之

永正六年九月二十八日

九八一

義尹善敘
ナシテ理
趣三昧法
ヲ修セシ
ム
導師光什
僧正著坐
甘露寺元
長辻章長
御願文章
草入文ヲ
清書世尊
寺行季
精進解

永正六年九月二十八日

九八二

御願文

〔願文集〕

五

夫立極執中、九域共歸大化之舜、躰元居正、百世猶知至德之周、想視聖恩之被民、最抵皇統之歷運者哉、伏惟先皇陛下、博厚配物、高明施仁、道如環之無端、治歌三代、禮似筆之有舌、言記五常、恭儉存心、階不崇羹不味、遐邇傳命、車同軌、書同文、曾羨獲呂望、未弃屠釣之士、每願歸伊尹、何羞俎豆之臣、萬機終不荒、百揆云有次、加之詞續和什唐、躰可詠可歌、樂寫韶石咸池、盡善盡美、吁嗟昨促六龍之駕、雖祈上壽於宸君、今望八駿之遊、終失幸儀於冥路、梓宮雨晴、龕燈空照顏、荆山雲愁、白鼎徒記德、爰眇身叨登旋極之祚、偏荷鍾愛之恩、輔弼猶希、慙禹無十人之衆矣、夷蠻相背、嫌湯以七里之地焉、弔祭之禮不全、號泣之情彌切、因茲奉供養釋迦如來尊像一幅、奉摺寫妙法蓮華經一部八卷、并開結心阿等經各一卷、廼命權僧正法印大和尚位光什爲唱導師、堂々襟宇、落々玄機、朝野共仰清風、氣絕蔬筍、緇素久聞法道、辯起波瀾、實是應世之材、可謂凌雲之器、時也殘菊凋零、塵泥般若臺之露、落葉寂寞、雨悲祇樹林之秋、時景感人、々感時景、然則尊靈眞源了々、直到淨蓮之會場、法界昭々、頓秉惠炬於刹土、乃至遊魂逝魄上界下生、回向平均、功德無際、敬白、

永正六年九月 日

諷誦文

敬白

請諷誦事

三寶衆僧御布施

右

先皇聖靈昇霞之期漸遠、露往霜來、厚夜之夢不驚、鯨瘖龜寂、方今迎聖胎追飭之日、開佛經讚揚之筵、梵磬三聲、蚤答率陀天上、寶薰一瓣、遍滿安養界中、乃至群亡皆成頓悟、仍諷誦所修如件、

永正六年九月 廿八日

草 章長

〔歷代殘闕日記〕

八十二 宗典僧正記

永正六年

後土御門院樣、當年十ヶ年ニ御成候來申ノ年御十三年也、稱光院殿御十三年万供、宗觀行給候、宗濟ノ御記アリ、宗典十五ノ年十弟子仕候慶辨ト兩人也、○稱光天皇聖忌ヲ行ハル、コト、永應安ノ年、宗助万供御申候歟、記六ア

永正六年九月二十八日

九八三

御十年忌

永正六年九月二十九日

九八四

リシ様ニ存候、其例ニ宗觀御申ノ様ニき、候し、但不覺之、尋可存事也、
足利政氏、相模禪興寺ヲ再興セントシテ、同寺領ヲ還付シ、前建長寺住
持英瓊玉ヲ大勸進職ト爲ス、

〔明月院文書〕模○相

禪興寺□□□裏以功勞、寺領還補、寺家□□□哉、然者如舊規大勸進職之事、
御領掌可悅入候、恐惶謹言、

永正六年己巳
九月廿八日

政氏花押

建長寺前住玉蔭和尚蔭

二十九日、子盡連歌御會、

〔實隆公記〕一四十 九月廿九日、戊子、晴、

盡御會可豫參之由、蒙仰之間參入、於御三間有此事、下官、中御門大納言、冷泉
大納言冷泉、民部卿入道、布衣袴、不懸袈裟、甘露寺中納言、連參田向重治、兵部卿、大藏卿、新宰相、季綱
朝臣五條、爲學朝臣、執筆、秉燭之後終功、中間有御小漬、役送重親也、御會了、三獻有
之、今日季綱朝臣進上御樽之間如此、公條卿爲御陪膳參入、爲學朝臣、言綱朝
臣、重親等役送、三獻天酌也、每度天盃予頂戴之、祝著々々、○中略

參仕ノ人
々々
甘露寺元
長連參
執筆五條
爲學
阿野季綱
樽ヲ進上
ス

御製

賦唐何

御製
花よ春紅葉よとまる秋もあし

朝夕きりの遠近の山下下官

十月二日、庚寅、霽

相公參伏見殿、和漢一昨日殘、被終功云々、

永正六年九月二十九日

九八五

是秋、義尹、名笙ヲ獻ズ、

〔體源抄〕

九

私記云、永正六年秋ノ比、將軍家一管ノ御器ヲ被召置、後ニ予

義尹笙ヲ
豐原統秋
ニ示ス

統秋、簧ヲ
取替ヘテ
試ンコト
ヲ請フ

豐原公里
祕藏ノ器
其銘

松木宗綱
ニ示ス

叡覽アリ
タキ由ノ
勅詔

ヲ召テ是ヲ見セサセラル、於御前是ヲ拜見ス、言語道斷ノ御器ナリ、奇特由
申上、簧古物ニテ一向ニ吹レス、試新キヲ被立替テ、吹試度由ヲ申上、尤ノ由
被仰下、然ハ私所持ノ簧、今度南都行元ニスカシタルアリ、御器ヲ被下可調
申歟ノ由申上、則被出之間、私宅ニテ調之、仍竹ソノコハセ侍ハ、字ヲホリ付
タリ、能々見之者、公里祕藏ノ器也、永ク家ニ失フヘカラサル由書付、不思議
ノ由申上テ調テ進之、公方ニモ御自愛之由被仰下、音勢勝タルコト名物ニ
ヲトルヘカラス、此器ヲ先中御門大納言宗綱ニシセ御申、コレハ近比ノ御
器也、サレモ美之竹一別ノ竹ニテ、色替ヨシ御申、コレカ疵ナルヘキカトノ
御沙汰ナリト云々、予ヨク見侍ハ、節モ同、スアヒモ同シ、又竹ノウラモ同シ、
只面ノ色チカヒタリ、是ハ音モ同シカルヘシト存也ト申上侍、爰私記録ニ
マサニ見及タル所アリシナリ、サレモ卒爾ニハト存當座ニハ不申、イカサ
マ名ノナキコトハアルマシ、涯分尋可申由ヲ申上テ、是ヲ當今聞召テ、叡覽ア
リタキ由、内々被仰下由ヲ申上處ニ、則進上之、以外ノ外御叡感也、暫ヲカシ

義尹統秋
ヲシテ獻
上スベキ
由申サ

名ヲ付名
物ニ入ル
ベシトノ
勅定親王
輔仁親王
御所持ノ
變所稱ノ
スルモノ

テ可被^(叡覽カ)由御申アリ、サヤウニ思召ル、上ハ、忝御事也、イカヤウニモ被召置
様ニ、統秋可申沙汰由、以叡阿被仰下、其仰則可披露申由申上、折節御稽古ニ
被召應間^(マ)祇候仕、將軍家御申旨申上、サテハ神妙ノ御申ナレモ、御器アマタ
モ無御坐ヲ、無骨ナル様ニ被思召由勅定アレモ、統秋イカヤウニモ申成テ、
御物ニナサル、様ニト、仰旨重テ申上ノ間、サラハ御返事ニ、一段御祕藏有
ヘシ、名ヲ付ラレ名物ニ可被入由勅語也、仍私カ記ヲ撰、右ニ注處明白也、疑
フヘカラス、此器ハ^(後三條天皇皇子)三宮輔仁親王御器變黑也、竹一白シトアリ、不審ナキ處
也、則記所上意御覽アリテ、不思議ノ由被仰下、忝者也、内裏ヘモ此旨可申上
被仰下、即御月次之御樂ノ時、以中御門大納言殿申上處、尤御自愛ノ^(擇カ)擇申
入、神妙ノ由被仰下、家ノ面目不過之、此記者續教訓抄也、可仰可貴之、

大日本史料 第九編之一終

大日本史料第九編之一

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
一四三	一四	令進上、禁裏	令進上禁裏	六六九	一一	薩摩龍雲寺住持良從 <small>（龍二）</small> 、大通德光禪師ノ號ヲ賜フノ一條ヲ削ル	薩摩龍雲寺住持良從 <small>（龍二）</small> 、大通德光禪師ノ號
二三一	四	西園寺實宣	西園寺公藤	七三七	五	同六 <small>（正水）</small>	同六 <small>（正水）</small>
二三一	七	西園寺家雜掌	西園寺家雜掌	八〇四	一三	左大辨宰相 <small>（廣權光）</small>	左大辨宰相 <small>（廣權光）</small>
二九四	五	四條坊門、柳筥	四條坊門柳筥	八〇四	一四	三條宰相中將 <small>（全數）</small>	三條宰相中將 <small>（全數）</small>
二九四	八	四條坊門、柳筥	四條坊門柳筥	八六三	一四	針少路 <small>（小）</small>	針少路 <small>（小）</small>
三八五	一二	田忠教忠氏	田中教忠氏	九六九	一一	宗山 <small>（高橋野）</small>	宗山 <small>（高橋野）</small>
四八五	一一	景通等來 <small>（木神）</small>	景通等來 <small>（大神）</small>				

昭和三年一月二十八日印刷
 昭和三年一月三十日發行

（大日本史料第九編之一奥付）

豫約價金七圓



編纂者 東京帝國大學

印刷者 西濃印刷株式會社岐阜支店

發行所 東京帝國大學文學部 史料編纂掛

電話小石川(85)七〇二番
 四〇二番

大日本史料
大日本古文書
既刊目錄 (昭和三年一月現在)

大日本史料

第一編 (平安時代)	第一卷至第五卷	宇多天皇和三年八月ヨリ 醍醐天皇延長五年十月ニ至ル	五册
第三編 (平安時代)	第一卷至第二卷	堀河天皇應德三年十一月ヨリ 寬治七年九月ニ至ル	二册
第四編 (鎌倉時代)	第一卷至第十六卷	後鳥羽天皇文治元年十一月ヨリ 仲恭天皇承久三年七月ニ至ル	十六册 (完)
	補遺別冊 (一)	建久四年正月ヨリ 建仁三年十二月ニ至ル	一册
第五編 (鎌倉時代)	第一卷至第六卷	後堀河天皇承久三年七月ヨリ 後喜三三年十月ニ至ル	六册
第六編 (建武中興及南北朝時代)	第一卷至第廿三卷	後醍醐天皇元弘三年五月ヨリ 後村上天皇正平十六年十二月ニ至ル 後光嚴天皇康安元年十二月ニ至ル	廿三册
第七編 (室町時代)	第一卷	後小松天皇明德三年閏十月ヨリ 應永二年三月ニ至ル	一册
第八編 (室町時代)	第一卷至第十三卷	後土御門天皇應仁元年正月ヨリ 文明十三年十二月ニ至ル	十三册
第九編 (室町時代)	第一卷	後柏原天皇永正五年六月ヨリ 同六年九月ニ至ル	一册
第十一編 (桃山時代)	第一卷	正親町天皇天正十年 六月ヨリ七月ニ至ル	一册
第十二編 (江戸時代)	第一卷至第廿七卷	後陽成天皇慶長八年二月ヨリ 後水尾天皇元和三年八月ニ至ル	廿七册



大日本古文書

編年文書

第一卷至第六卷 大寶二年十一月ヨリ 寶龜十一年ニ至ル

第七卷(追加一)至第十七卷(追加十二) 和銅元年七月ニ至ル

家わけ文書

第一 高野山文書

第二 淺野家文書

第三 伊達家文書

第四 石清水文書

第五 相良家文書

第六 觀心寺文書

第七 金剛寺文書

第八 毛利家文書

第九 吉川家文書

第十 東寺文書

第十一 小早川家文書

幕末外國關係文書

第一卷至第十八卷 嘉永六年六月ヨリ 安政四年十二月ニ至ル

附錄之一至四

六冊

十一冊

八冊(完)

十一冊(完)

十冊(完)

六冊(完)

二冊(完)

一冊(完)

一冊(完)

四冊(完)

二冊(完)

一冊(完)

二冊(完)

十八冊

四冊



